

第 23 回 ちゅうでん教育振興助成（2023 年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	香川大学教育学部附属高松小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	英会話ロボットを活用した外国語科の授業づくり

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1. 実施計画に至るまでの経緯

小学校高学年に「外国語科」が創設されて4年目を迎える。授業においては、外国語による言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を養うことが求められており、学習指導要領では、「初めて外国語に触れる段階である小学校においては、相手に発する外国語を注意深く聞いて何とか相手の思いを理解しようとしたり、もっている知識などを総動員して他者に外国語で自分の思いを何とか伝えようとしたりする体験を通して、言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを改めて感じる事が、言語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で重要である。」と示されている。また、2017年に文部科学省より刊行された『小学校外国語活動・外国語科研修ガイドブック』においても、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う。」と明確に定義されている。このように、小学校外国語科においては、より現実のコミュニケーション場面を意識するために、「コミュニケーションの目的や場面、状況」を設定した上で、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を重視していることがわかる。

本校で行う外国語の授業においても、英語を使用しながら会話をする状況をできるだけつくりたいと考え、友達やALTと英語を用いて交流するという場면을意図的に設定するように心がけている。しかし、授業中においては、英語を用いて会話する姿は見られるものの、日常生活で英語を用いて話す姿は少ない。

そこで、昨年度は、英語を使ってコミュニケーションを図る状況を設定し、英会話ロボット「Musio X」を用いて、スピーキングのアウトプットの量を確保したいと考えた。子どもたちは、ロボットと英語で何度もコミュニケーションを取ることで、英語を使うことに自信がもて、外国語科の授業の中でも、友達やALT、地域の外国人に対して、英語を使って主体的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるなどの成果があった。しかし、ロボットとの関わりの中では、理解できない英語を聞いたり、上手く伝えたいことを伝えられなかったりしたことで、会話を中断する子どもの姿も見られた。そのような姿から、今年度もMusio Xを使って、コミュニケーションへの情意面を高めるだけでなく、ロボットとの会話で困った時の場면을外国語科の授業で取り上げ、解決策を見出したり、言語の正確性を検証したりする。そうすることで、外国語科の授業の中で、これまで以上に場面や状況が複雑になっても、何とか習得した言語材料を使って他者とコミュニケーションを図る子どもの姿を実現できると考えている。また、英会話ロボットだからこそできる言語材料習得方法のよさを見出すことで、日々の外国語科の授業においては、どのように言語材料を習得していくべきかが吟味でき、言語活動の質的向上につながることを考えた。

2. 活動内容

(1) 対象者 5年生(104名)

(2) 教科 外国語科

(3) ねらい 英会話ロボットを活用した外国語科の授業づくり

岡山の小中学生やALTと、香川県、岡山県ならではのご当地の食の魅力を紹介し合うという授業を設定し、実際に岡山の小中学生やALTに話す場面の前段階として、授業中や授業外で英会話ロボットを用いることで、外国語を話すことへの意欲の向上や会話に困った時のコミュニケーションの取り方を見出す。

(4) 授業実践の特色や授業づくり

石井英真(2020)は、「思考する必然性を生み出す上では、実際に生活や社会で直面するような状況に即して問題場面(真正な課題)をつくるのが有効である」と述べており、私たちのこれまでの授業実践においても、真正な課題を扱うことで、子どもたち自身の課題解決に対する意欲が高まることを実感している。

そこで、本実践では、「岡山の小中学生やALTに香川の食の魅力を紹介する」という単元で授業を行う。岡山の小中学生だけでなく、ALTと実際にコミュニケーションを取るというゴールを設定することで、子どもたちは英語を使わなければいけない状況に置かれ、課題解決に対して切実な状況が生まれるようにした。このような課題を子どもと共有した上で、コミュニケーションの目的や場面、状況に着目して、よりよい表現方法を見出していった。

単元の中で、実際にALTや外国語担当教員、そして英会話ロボットを相手に英語表現の練習を行った。普通の授業であれば、友達相手に英語の練習を行うという交流が多いが、「本当にこの表現や発音で実際に伝わるのか」という点については、子ども自身も実際は分からないというのが現実である。しかし、英会話ロボットを活用することで、子どもたちの話したいことを英語で話してみたり、気になる英語の表現がロボットに伝わるか確認してみたりといった活動が可能になった。また、授業外の時間にも英会話ロボッ



言語材料の発音を確認する子どもの姿

トを使用できる状況をつくることで、休み時間等でも積極的に練習できる機会の確保ができた。

さらに、本実践を行うにあたり、外国語授業における先進的な取り組みを行っている大分大学教育学部附属小学校を視察した。低・中・高の全学年で公開授業を行っており、子どもの主体性を重視しつつも、6ヵ年で系統的に言語材料を習得するために、発達段階に応じた言語活動の設定、中間評価の在り方について学ぶことができ、本実践で目指す「外国語科の授業の中で目指すべき言語材料の習得の在り方」という点において、大変になった。

大阪樟蔭女子大学の兼重昇教授、佛教大学の赤沢准教授からは、話し手としての練習に加え、聞き手として受け答えを行うための練習にも有効であること、他者との即自的なやり取りへのハードルを下げするために有効であることをご指導いただいた。

3. 子どもたちへの効果(成果・課題)

本研究を通して得ることができた成果は、子どもたちにとって必要感のある練習は、ゴールの言語活動に向けて有効であることだ。英語ロボットを単体で扱うのではなく、単元の言語活動の大きな軸があるからこそ、子どもが英語ロボットを扱う必然性が高まり、自分たちが見出してきた本物の言語材料を英語ロボットに聞いてもらおう、確認してもらおうとする子どもの姿が見られた。言語活動と練習の往還を目指す外国語の授業において、子どもが練習をも楽しむことができる大きな手立てになると考える。

課題は、運用コストや台数等の英語ロボットを扱う環境面の設定の難しさである。本研究では、ロボットという形を取ったが、重要なのは、子どもの発話したことに対して、反応があることである。一人一台パソコン等に対応するソフトで代替ができないかなど、今後も活用方法の活路を見出していきたい。